

平成12年度
(2000)
第40回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌清田

【 大会寸評 】

男子団体戦は予想通り、札幌藻岩高校の圧勝に終り、11年連続21回目の優勝を飾った。内容的にも他校を寄せつけない選手層の厚さを示した。第2シードの札幌日大を破って準優勝になった札幌光星の健闘も賞賛に値する。ジュニア選手が主流を占める中、高校入学後にテニスを始めた選手が主力の札幌光星であった。女子団体戦も札幌清田高校は1ポイントも失うことなく、4年連続16回目の優勝を果たした。

個人戦の男子シングルスは4人枠の全国大会出場権を札幌藻岩の松坂・千葉・岩野の3人が占め、圧倒的な強さ、層の厚さを示した。札幌日大の原田も2年としてはたいへん頑張った。ベスト8に札幌日大が3名、札幌光星が2名入り、来季が期待される。男子ダブルスは、松坂・千葉組（札幌藻岩）が優勝し、第2位に黒田・北村組（札幌光星）が入り、全国大会出場を果たした。

女子個人戦では、シングルス優勝の松本（札幌清田）と準優勝の柴田（札幌稲雲）の活躍が光った。

【 全国大会 】

男子団体戦の札幌藻岩は前回と同じベスト16まで駒を進めた。ベスト8を決める試合ではダブルスで先行したが、シングルスで勝てず、残念な結果となった。女子団体戦もダブルスが先行したけれど、もう一步のところ勝利には手が届かなかった。

男子個人戦シングルスでは、松坂（札幌藻岩）が、3回戦で日大二島の樋口を倒したことが大きな成果である。

女子個人戦シングルスは2年生の松本（札幌清田）が2回戦まで進んだ。また溝渕が2回戦で、湘南工大附の選手と互角に試合をしたことも見逃せない。男子ダブルスは両ペアともに健闘したがもう少しのところ敗退した。

女子ダブルスは、松本・溝渕組（札幌清田）が3回戦まで駒を進め、全国ベスト16はよく健闘したと言える。3回戦は第1シードで優勝したペアとの対戦であり、別のブロックに入っていたら異なる結果になっていたのではないかと悔やまれる。

北海道では経験することがない高温・高湿の中での試合は、道内選手には厳しいものがあった。しかし、本州の暑い夏という条件下で行われるインターハイに臨む上では、暑さに対する備えも含めた十分な準備が必要であろう。

優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

20世紀最後の夏、僕達藻岩高校男子テニス部は、帯広市で6月20日から3日間にわたって行われた第40回北海道高等学校テニス選手権大会に出場し、団体で見事優勝を果たしました。大会の1週間前に1番手の松坂が怪我をするというアクシデントに見舞われながらも、シングルス1、シングルス2、ダブルスとも決勝まで1ポイントも落とさず、他校を寄せつけない強さで圧勝しました。決勝の相手は札幌光星高校。準決勝で、札幌支部大会2位の札幌日大高校を接戦の末にくだし、決勝に進出した力のある学校です。対戦はシングルス1が松坂対北村。シングルス2が岩野対黒田 ダブルスが千葉・森組対今野・竹田組。3試合とも同時にコートに入り、試合を開始しました。まず最初に勝ち屋をあげたのが、ダブルスの千葉・森組で、8-1と圧勝し、続いてシングルス2の岩野が2年生ながらも、8-2とこれも圧勝でした。シングルス1の松坂も勝負が決した時点で打ち切りになりましたが、7-4と圧勝ムードでした。結果は2-0で藻岩高校の完勝。11年連続21回目の優勝となりました。1年生の時から共に頑張ってきた仲間と勝ち取った勝利だからこそ、大変うれしく、大変思い出深いものとなりました。2年生まで厳しくご指導下さった緒方先生、そして現顧問の前之浜先生、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

(札幌藻岩高校 主将 千葉 建人)

優勝のよろこび

女子 札幌清田高等学校

私たちの代は3年間、支部・全道共に全て団体優勝を果たすことができました。「北海道で優勝することは単なる通過点。全国大会でいかに活躍するかが目標」の部活でしたが、やはりいかなる状況でも毎回優勝するということは大変なもので、最後の帯広での全道大会で優勝した時は「うれしい！」とか「やりとげた」というものより、「ホッ」としたというのが一番の感想でした。そして先生も私たち部員も1年間に数ある試合の中で「インターハイ」に一番力を入れて練習してきているので、当然の優勝とはいえ格別の喜びが段々どこみあげてきました。第1シードですが、優勝するまでには毎回色々なドラマがあります。部員の怪我やコートの改修工事などで、試合前なのに練習コートを確認することすら大変な時もありました。そういう経験の中から、あたえられた状況の中で精一杯頑張るということを学べたのはこれからの人生にも大変役立ったと思います。全道大会では初戦から決勝まで1ポイントも落とさず優勝することができ、この調子で全国大会も頑張った

のですが、初戦敗退という結果に終わりました。私たちの代はこれで終わりますが、後輩たちには私たちや卒業された先輩方が越えることのできなかったベスト16の壁を乗り越え、全国でも是非活躍してもらいたいです。

(札幌清田高校 主将 溝渕 晴香)

全国高校総体 (第90回全国高等学校庭球選手権大会) 岐阜

8月9日～16日 岐阜メモリアルセンター長良川テニスプラザ
岐阜ファミリーパークテニスコート

男子 個人戦シングルス	優勝	金山 敦思 (四日市工業)
	準優勝	近藤 大生 (名古屋)
女子 個人戦シングルス	優勝	新井 由樹 (藤村女子)

平成12年3月

第22回全国選抜高校テニス大会 参加報告

札幌稲雲高等学校 佐々木雄介 中嶋照明

(札幌支部顧問会議への報告書)

1 選抜大会の位置づけについて

団体戦は、47都道府県から概ね男女各1校ずつ出場して開催されるインターハイの平成11年度の出場校数は51校。一方、全国9つのブロックから複数の学校が選抜される全国選抜高校テニス大会の出場校数は、97年の第19回大会から48校となり、数の上ではインターハイと大きな違いがなくなった。以来、北海道代表も、男女各4校ということに定着している。稲雲高校は初出場の18回大会を皮切りに、19回・20回、そして今回の22回大会と、都合4回出場することが出来たが、内訳は第2代表が3回、第3代表が1回。つまり、いずれもこの選抜方法の恩恵に浴している。

団体戦でのインターハイ出場など臨むべくもない北海道第3代表としては感謝して余り

あるこの選抜方法であるが、一方で、この選び方は、全国選抜大会そのもののレベルを極めて高いものに押し上げる結果にもつながっている。例えば、東北6県からは例年4校程度しか出場できないのに対して、関東の8都県からは10校を越える数が出場する。言い換えれば、競技レベルの低い県からは1校も出場できないのに対して、東京、大阪、兵庫、福岡などの強豪都府県からは2校出場できる仕組みになっているのだ。

2 北海道の女子のレベルについて

資料を調べると、過去22回の大会で北海道の女子は6校が延べ39回出場し、12勝39敗の成績が残っている。12勝の内訳は、清田が7勝、静修が3勝、稲雲が2勝である。

一方で、インターハイにおいて、男子の藻岩高校や女子の清田高校が、例年は概ねベスト16に入る健闘を見せており、加えて一昨年の国体で藻岩高校が全国制覇を成し遂げたことは記憶に新しいところである。

春の選抜大会はなぜ勝てないのか。冬期間の練習場所の問題だけが原因だろうか。あるいは、私たちは12勝39敗の成績を、北海道の高校テニスのレベルとして甘んじて受け入れるしかないのだろうか。

稲雲高校は一昨年の20回大会では、近畿8代表中第8位の久御山（京都）に2-3で敗れている。また、今年の本大会では、関東10代表中10位の竹園（茨城）と対戦し、0-5で惨敗した。考えようによれば、恵まれたドローを生かすことができず、各地区最下位の代表と対戦した北海道最下位の代表の責任を全く果たせなかったことになる。

その不本意な事実を受け入れながらも、では北海道の女子のレベルは12勝39敗の成績を額面通りに認めるしかないほどに低いものなのか、というと、決してそうではないと思う。言い訳や負け惜しみの誹りを恐れずに言えば、対戦したどの学校も、決して勝てない相手ではなかった。

では、なぜ勝てないのか。何が足りないのか……それは「試合勘」「ゲーム勘」だと私は思う。10月の苫小牧で代表決定戦を行って以来5ヶ月以上、真剣な対戦はおろか練習試合さえ満足に行えずに、ぶっつけ本番で全国選抜大会に臨むのが現状である。本道勢の、とりわけ経験豊富なジュニアを擁しないチームにとって、このことは選抜大会で実力を出し切れない大きな要因になっている。

困難はたくさん予想されるが、例えば冬期間に、選抜大会の北海道代表を壮行するような大会を企画できないものだろうか。代表校同士の、あるいはそれに代表になれなかった学校から選ばれた選手による選抜チームを加えての壮行試合……そうすれば、全国レベルの試合が道内で行えることになる。道テニス協会から選抜大会の代表校に割り当てられる宮の沢室内競技場の練習コートをこれに使ったり、合宿費として代表校に分配される予算をこれに充てるなどの方策を考えれば、あながち無理なことでもないように思えるのだが……。

3 大会前の練習試合について

稲雲にとっては、1試合で終わってしまった大会本番より、事前にいろいろな学校と行った練習試合の方がずっと大きな意味を持っている。今回は福岡市に隣接する春日市で行

われた練習試合に参加することができた。椋山（愛知）、仁愛女子（福井）、星稜（石川）、華頂女子（京都）、久御山（久御山）、栗東（滋賀）、筑紫女学園（福岡）、それに北海道の札幌清田と札幌稲雲を加えた9校が参加。稲雲以外はベスト8入りを窺って全国に名を馳せる中堅どころの強豪ばかりである。

結果は2日間で3勝35敗。負けて落ち込みはしたものの、これではほどの強敵と当たっても物怖じして力を出し切れないという心配はないだろう……私たち顧問がそう思ってしまったことが、もしかすると今回の惨敗の最大の原因だったかもしれない。

4 大会2回戦 対・竹園（茨城）

顧問の欲目ではなく、全国の強豪の中で札幌稲雲がどんなに低い位置にいるとしても、あの相手に、あれだけの力しか出せなかったことが、今もって納得できないのである。

練習試合を終えて本場に向けたチームのモチベーションは十分に高まっていたし、ある程度は戦えるという自信も生まれていたと思う。にもかかわらず何一つできなかった。シングルス3に起用した1年生は、試合開始からフォールトを8連発。相手にレディポジションをとらせただけで、第1ゲームを無償で提供するありさまだった。

ゲーム勘の欠如などという要素も含め、惨敗の責任は、あの状態でチームに試合を戦わせてしまった監督にあると言わざるを得ない。

思わぬ大敗に意気消沈しているところに、ある学校から、翌日の練習試合の申し込みがあった。相手は、東北の第2代表、宮城第一女子高校。思い起こせば、4年前、初出場の18回大会で、札幌稲雲は宮城一女と対戦している。あのときは3-1で勝ったのだが、顧問の先生はそのときのことを憶えてくださっていた。

雨混じりで始まった練習試合。時間を追うに従って雨脚は強まり、私たち北海道の人間の感覚では“土砂降り”と表現すべき降り方になった。ところが、10数面あるオムニコートのあるあちこちで行われている同じような練習試合は一向に中断する心配がない。温暖な地方ではこれが普通だということだろうか。稲雲の生徒たちはといえば、滅多に経験できない“雨中試合”が楽しくてならないようで、表情にもやっと明るさが戻った。しかし、結果は2-3。4年前の借りを返されてしまったが、夏への再起のきっかけぐらいはつかむことができたようだ。いい練習試合になった。

2回戦 対・竹園（茨城）

0-5

D 1	齋藤聖子・小木田紀江	1-6
D 2	庄司真由美・齋藤めぐみ	0-6
S 1	柴田香織	1-6
S 2	岡本加奈子	1-6
S 3	秋庭佳奈恵	0-6